報　告

前漢皇帝十一陵の踏査

橋本　義則

山口大学人文学部の「科学研究費の間接経費に関わる研究プロジェクト経費」を得、2009年11月７日から15日にかけて中華人民共和国陝西省西安・咸陽両市を訪れ、前漢の皇帝陵と皇后陵、及びそれらに関連する遺跡の踏査を行った（図１・表１）。今回は、主に地上に遺る遺構の確認、特に建物の台基と陵園を巡る垣の痕跡をたどるとともに、遺跡・遺構の現状写真を撮影することに主眼をおいた。なお、この踏査は、科学研究費補助金･基盤研究（B）「東アジア諸国における都城及び都城制の比較を通じてみた日本古代宮都の通時的研究」（課題番号：19320102、研究代表者：橋本義則）による都城遺跡と陵墓の構造の比較検討を目的とした調査と連繋し、連携研究者である奈良県立橿原考古学研究所林部均氏も加わって行った。

現地では、西北大学文博学院考古系の王建新教授の助言と協力を得、その修士課程留学生である金杉大志君の同道のもとに踏査を実

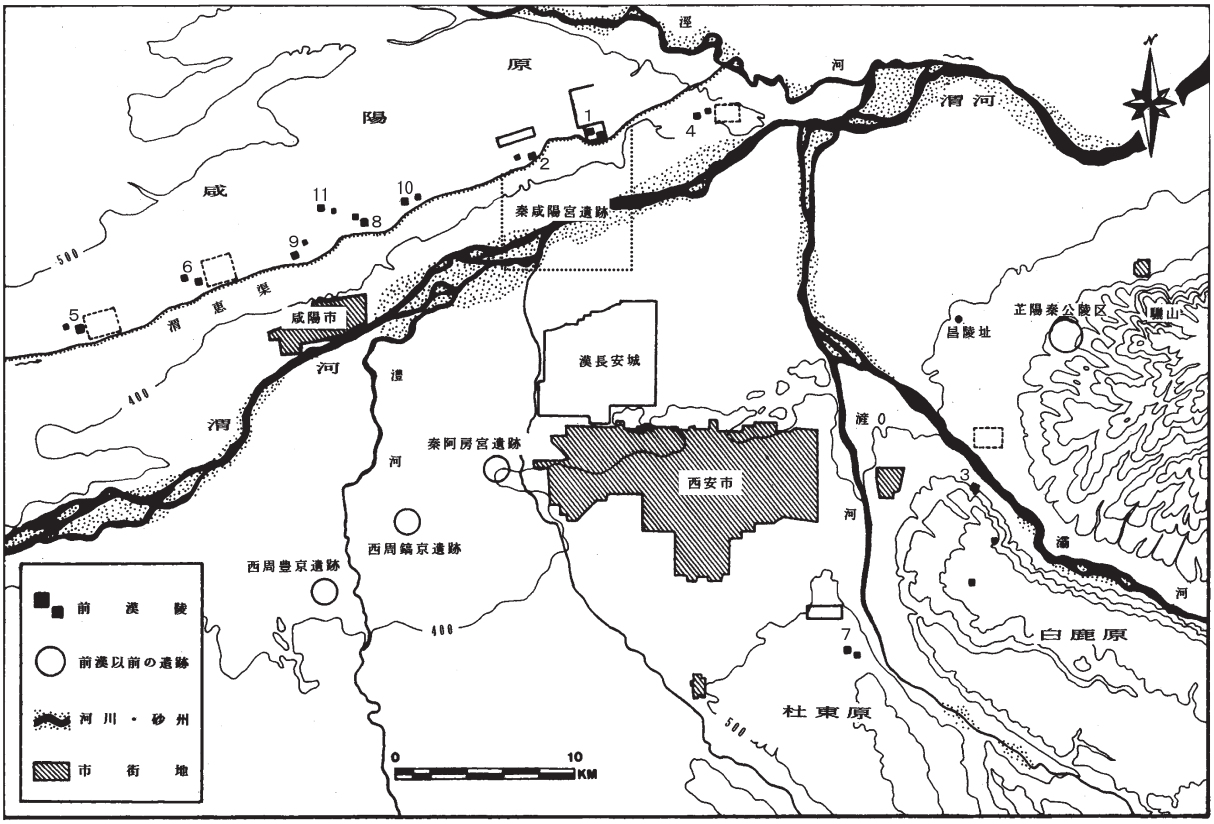

図1　前漢皇帝十一陵の分布（『前漢皇帝陵の研究』所収「図1　前漢皇帝陵分布図」を一部修正。図中の数字1～11は表1中の数字に対応。）

施した。ただ、我々が滞在した一週間あまりのあいだ、西安・咸陽の天候は極めて不良で、視界わずか数メートルしかない濃霧と激しい降雨、さらには十一月としては何十年ぶりかの降雪のため、踏査は困難を極めた。それ故に、当初予定していた全陵の陵園・陵邑の全体的な踏査は実現し得なかったが、そのような状況においてもなおいくつかの知見を得ることができた。また機会を得、天候に恵まれた中でこれらの点を再確認するとともに、今回なし得なかった諸点についても改めて踏査を行いたいと考えている。なお、濃霧と降雪の中、しかも頻繁に変更される中国の道路事情では、中国で購入した最新の道路地図や中国製の簡易なカーナビは全く無用の長物であったが、緊急連絡用として携帯していたApple社のiPhoneにGoogle Earthがインストールされており、それを用いてようやく踏査対象にたどり着けた場合が少なくなかった。

皇帝陵	皇帝（在位期間）	通説	王説	構造等	発掘調査等実施機関	博物館等展示施設
長陵	高祖　劉邦（B.C206～195）	1	1	陵園は皇后陵と一体で平面長方形、陵邑有、陵園外に建築遺址有		
安陵	恵帝　劉盈（B.C195～B.C188）	2	2	陵園は皇后陵と一体で平面長方形、陵邑有	咸陽市博物館	
覇陵	文帝　劉恒（B.C180～157）	3	3	因山為陵、陵園は皇后陵と各別、陵邑有		
陽陵	景帝　劉啓（B.C157～141）	4	4	陵園は皇后陵と各別で平面正方形、陵邑有、陵園外に礼制建築など建築遺址有、刑徒墓地有	咸陽市博物館 陝西省考古研究院	漢陽陵考古陳列館･漢陽陵帝陵外蔵坑保護展示庁･南闕門遺址保護展示庁
茂陵	武帝　劉徹（B.C141～87）	5	5	陵園は皇后陵と各別で平面n正方形、陵邑有、陵園外に建築遺址有	陝西省考古研究院	茂陵博物館
平陵	昭帝　劉弗陵（B.C87～74）	6	6	陵園は皇后陵と各別で平面正方形、陵邑有	咸陽市博物館	
杜陵	宣帝　劉詢（B.C74～49）	7	7	陵園は皇后陵と各別で平面正方形、陵邑有、陵園外に礼制建築など建築遺址有	社科院考古研究所	（かつて杜陵陳列館？が存在したが、それは廃され、現在遺物は考古研究所で保管の由）
渭陵	元帝　劉奭（B.C49～33）	8	11	陵園は皇后陵と各別で平面正方形、陵邑無	咸陽市博物館	
延陵	成帝　劉驁（B.C33～7）	9	9	陵園は皇后陵と各別で平面正方形、陵邑無		
義陵	哀帝　劉欣（B.C7～1）	10	8	陵園は皇后陵と各別で平面正方形、陵邑無		
康陵	平帝　劉衎（B.C1～A.D5）	11	10	陵園は皇后陵と各別で平面正方形、陵邑無		

表1　前漢皇帝十一陵の概要表

さて、ここでは、与えられた紙幅の関係と帰国後における踏査記録の整理の進捗状況から、前漢の皇帝十一陵を個別に全て取り上げ、踏査の記録を細かに記すことは避け、まず具体的な踏査の報告として、王建新教授が「後四陵」と呼び、通説的な比定に疑義を呈している前漢末の四皇帝陵の踏査記録を記し、次いで今回の踏査で確認できた諸点や今後の課題点について述べることにする。

（1）「後四陵」の踏査

11月11日、雪が降りしきる中、西安市街から北西に30㎞ほど離れた咸陽市渭城区にある前漢末の四代の皇帝陵、渭陵・延陵・義陵・康陵の四陵の踏査に向かった。この四陵は咸陽市街の北を走る一本の道路の南北に、西から延陵・康陵・渭陵・義陵の順に、ほぼ等距離で並び（図１・表１）、現在はいずれも全国重点文物保護単位に指定されている。

①延陵

降雪と濃霧で視界は５メートルほどであったため、延陵の踏査はもっとも困難を極めたが、上記したGoogle Earthがここでは大いに役立った。Google Earthの衛星写真（以下単に衛星写真と略す）は必ずしも最新のものではないが、自動車が入れるような道路は十分弁別でき、現在位置を衛星写真上で確認しながら、延陵の所在を探って進んだため、延陵を通り過ぎることなく、また誤った道に入って時間を無駄にとられることもなく無事たどり着くことができた。

延陵の形状は覇陵を除く前漢皇帝陵に共通する截頭四角錐であるが、遠くから見ても南面中央が縦に大きく陥没していることがわかる。ここから墳頂に登れるようであったが、積雪のために断念し、主に墳丘の南面、陵園内で観察を行った。南面の陵園の垣は高さ0.5～１メートルで遺り、その中央に南闕門が高さ１～３メートルほど、厚さ10センチほどの版築で造られた土の高まりとして遺っていた。衛星写真では南と東西の垣およびそれらの中央に開く闕門址が確認できるが、北は明瞭でない。陵園内は外に比べて数メートル高く、南面では垣から外の西半部が大きく落ち窪んでいる。陵園内部は平坦でなく、墳丘に近づくにつれ次第に高くなるが、観察を行った南面では南闕門と墳丘南辺の中間点辺りで墳丘側がさらに一段高くなっている。ただ、これが本来のものか、後世の造作によるものか現状では明らかでない。墳丘の南には、1956年８月に咸陽市人民政府が立てたおそらく陝西省第一批重点文物保護単位であることを記したと思われる「延陵」碑が、碑面の中央を大きく欠損したままで立っていた。また、清の畢沅が立てた「漢成帝延陵」碑と陝西省人民政府が2007年10月30日に立てた「全国重点文物保護単位　延陵」碑もやや離れてそれぞれ立っていた。なお、皇后陵に推定されている陵については、降雪ために陵の所在とそこへの進入路が確認出来ず、踏査を断念せざるを得なかった。

②康陵

延陵の踏査を終え、その東北に位置する康陵へ向かった。さいわい雪も小止みになり、霧も晴れ始めたので、康陵は比較的容易に見つけることができた。ただ、康陵も積雪のために墳丘の南方に限って踏査を実施するに止まった。劉慶柱・李毓芳両氏および王教授の研究ではともに陵園を復原しているが、今回の踏査では地上に明瞭な遺構を確認できなかった。ただ、衛星写真では墳丘平面の傾き

に合い、周囲の道路の方向に合わない道路や畦畔が認められるので、あるいはそれが陵園の痕跡であるかもしれない。全体の地形は延陵と同様、墳丘に向かって緩やかに高くなり、途中に低いが段状の地形を確認するができ、衛星写真でも墳丘南方に複雑ながら直線的な段状をなしていたと思われる地形も認められる。これが陵園の内外を分ける垣や陵園内の何らかの建築などにともなう遺構であるのかもしれない。墳丘は截頭四角錐を呈するが、頂部近くにテラスを設けて段を造っている。なお、陵の南辺一帯は今日も周辺住民たちの墓地で、造られたばかりの真新しい墓も存在した。その中に墓碑と混じって、1981年10月１日に咸陽市人民政府が立てた「第一批陝西省重点文物保護単位　康陵」碑があり、その横には「全国重点文物保護単位　康陵」碑と思われる碑が裏面の解説文を上にして倒れ、また「漢元帝」と刻んだ、清の畢沅が立てた康陵の碑の上半部分と思われる石の断片が転がっていた。

王皇后陵は康陵から東南東へ700メートルほど離れて位置するが、現在は咸陽市農業科学研究所の敷地に取り込まれ、その北半部にあった。墳丘を取り囲むように建物が建て込み、南辺に位置する建物によって裾部が大きく削られ、また、西辺には多くの資材が放置されていた。墳丘の南辺には1984年12月11日に咸陽市人民政府が立てた「陝西省重点文物保護単位　康陵合葬墓　王皇后墓」碑があり、それからやや離れた西辺には資材と混じって畢沅の碑（王教授によれば、過去の記録に「周成王陵」と刻まれていたという）がバラバラのまま放置されていた。研究所の建設にともなって大きな改変が加えられたのか、陵園に関する遺構は現状では全く地上に見あたらず、衛星写真でも垣など陵園に関係する遺構を確認できない。

③渭陵

王皇后陵の見学を終えたのち、渭陵を求めて東へ進んだ。渭陵と王皇后陵は周陵郷新荘村にあり、村の西外れにある王皇后陵から踏査を行った。皇后陵は墳丘の大きさに比して広い陵園が設けられ、今日も垣の遺構が陵園を巡っている（図２）。ただ四面の垣に設けられていたはずの四基の闕門の遺構は積雪のため確認できなかった。墳丘は截頭四角錐で、康陵と同様に頂部近くにテラスを設けて段を造っているが、墳頂は大きく陥没してい

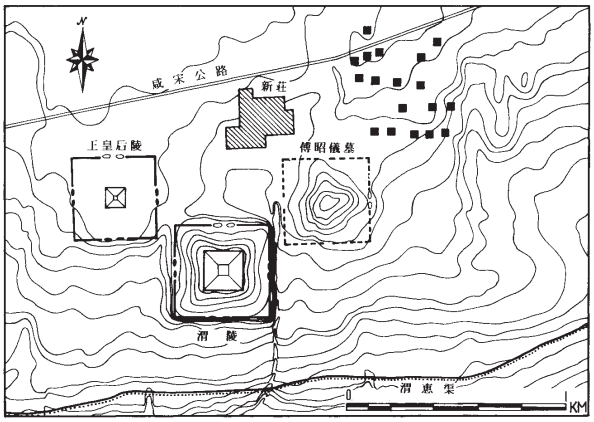

図２　渭陵周辺地形図（『前漢皇帝陵の研究』所収「図71　渭陵周辺地形図」）

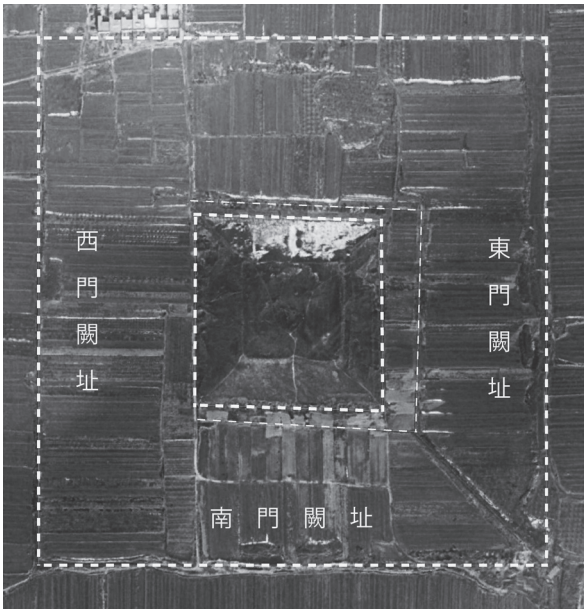

図３　渭陵陵園概図（Google Earth 衛星写真に加筆）

る。墳丘の周囲には幅10メートル前後で高さ２メートル以上のテラスが巡り、現在はその大部分に植栽が行われている。テラス南面の中央には幅25メートルほどで16メートルほど南に突出した張出部がある。この張出部が本来のものであるか否かはテラスとともに検討の必要がある。なお、墳丘南面テラス中央の張出部には、「王陵」と彫った碑が立っているが、それはおそらく畢沅が立てた碑（王教授によれば、彼が調査した段階では完存した「周康王陵」碑が立っていたらしい）の下半部で、その南で雪の下に埋もれていた石は上半部であろう。

渭陵は王皇后陵の東南にある（図２・３）。陵園は、垣が高まりとして遺っているので衛星写真でも明確に見て取ることができ、規模を確認できる。闕門も南と東西には地上に遺構が遺るが、北は遺構として確認できなかった。墳丘は截頭四角錐で、頂部近くには康陵同様テラスを設け段を造っている。また、墳丘の周囲には南と東と北で周囲より一段高いテラスが巡っている。東は幅が35メートルほどあるが、南と北は狭く15メートル前後である。西については明確なテラスを確認できなかった。墳丘の南方には1981年10月１日に咸陽市人民政府が立てた「第二批陝西省重点文物保護単位　漢元帝劉奭　渭陵」碑と2007年10月30日に陝西省人民政府が立てた「全国重点文物保護単位　渭陵」碑が並んで立てられているが、墳丘近くに立つ清の畢沅が立てた碑には「漢昭帝平陵」と彫られている。また、その近くには表面の殆どを欠損していてわずかに上部左寄りに「平」の一字のみを確認できる碑が立っているが、これは漢陵の他の事例や碑の形状・材質からみて、1956年に咸陽市人民政府が立てた碑と考えられる。

④義陵

渭陵踏査ののち、さらに東に向かって進み、義陵と孝哀傅皇后陵に向かった。まず、後者の皇后陵から踏査を行ったが、遠目にみても墳丘、特にその東半部が大きく破壊されていることを見て取ることができ、さらに近づくにつれ西半部にも破壊があり、特に東南部は殆どの墳丘を失っていることが分かった。周囲には陵園に関わるような遺構は認められなかった。墳丘が破壊されている西半部では、それ故に断面で墳丘を構築した版築の痕跡を観察できた。版築の一層はおおよそ23～24センチメートルと漢代の版築としてはやや厚めで、あまり締まっていない。なお、この墳丘が渭陵の皇后陵であることを示す碑などは周囲に見あたらなかった。因みに、王教授によれば、この陵は「典型的漢代の大墓とは形状を異とする」墳頂をもち、また版築には前漢晩期の瓦・陶片が含まれるということであるから、時期が下がる可能性がある。

次いで義陵に向かったが、風雪のためやはり墳頂部へ登ることはできなかった。義陵については、衛星写真でも東西と南に垣が遺っていることが分かる。踏査でも東西と南には低い高まりが見られ、衛星写真の状況を確認できたが、北は明瞭でなく、陵園の北限を決めがたい状況であった。陵園の四面に開くはずの闕門も地上に遺るのは東闕門址のみである。墳丘は截頭四角錐で、康陵や延陵と同様に、頂部近くにテラスを設けて段を造っている。全体が二～三段で築成されているようにも見えたが、上述したように墳丘に登って観察できなかったので、確認できていない。墳丘南面の西半部には新しい破壊の跡があり、これは衛星写真でも確認できる。墳丘の周囲には一段高いテラスが幅40メートル前後

で巡っている。なお、義陵にも墳丘南方に、1981年10月1日に咸陽市人民政府が立てた「第一批陝西省重点文物保護単位　漢哀帝劉欣　義陵」碑と2007年10月30日に陝西省人民政府が立てた「全国重点文物保護単位　義陵」碑が立てられていた。

（2）前漢皇帝陵研究に関する確認事項と今後の課題

今回の踏査は、上述したように、悪天候をおして行ったため十分な観察を行うことができなかった。特に陵園の周囲を細かに観察しながら回ることは茂陵以外では全く実現しなかったし、また、幾つかの皇帝陵では陵邑の存在が指摘され、その位置も遺構によって確認されているが、それも全く確認作業を行えなかった。ただ、今回、強行軍で十一陵を全て巡り、その所在地を確認したことは今後の踏査に十分生かすことができると考えている。実際に踏査して分かったことは、参考とした論著の内容通りの現状であった陵は一つとしてなく、保護されているはずの陵においても大きな改変が加えられ、保護が行き届いていない陵では驚くべき破壊が進んでいることである。経済成長の著しい中国では開発や無理解による破壊が横行しているだけでなく、しばしば陵墓の盗掘が報じられ、近くの村がそのまま泥棒村であったとの報道も行われている。しかし、日本と異なり有史以来の遺跡が多く地上に遺構として遺る広大な領土をもつ中国では、それら全てに保護と監視の目を光らすことは殆ど不可能であり、またそれを順次発掘調査することも非現実的である。また、外国人による測量や実測による図面の作成が認められていない現状では、踏査による地上観察と写真撮影、そして様々な年代の衛星写真の収集と検討が必須である。

今回の限られた踏査で確認できた具体的な事項の一端は上記したが、十一陵を踏査して陵園が周囲より一段高い地形を選んで造られただけでなく、実際に垣で囲まれた陵園内が明らかに外側より高くなっていることである。また、垣から次第に墳丘へと傾斜をつけ高くしているだけでなく、後半の陵では墳丘の周囲にテラスを設けているものもあることが分かった。ただ、このテラスが本来のものであるのか否か、特に南面に突出部を設けている事例には検討の余地がある。

また、墳丘については、墳丘の途中に数段のテラスを設ける例や細かに多くの段を設けて墳丘を造る例もあるが、これらが何時のものであるのか検討が必要である。王教授のいう「後四陵」に限っても、墳丘の形状、特に康陵・渭陵・義陵で確認できた、墳頂附近におけるテラスの存在は、延陵には確認できない。「後四陵」では、延陵と他の三陵で中軸線の傾きが異なり、延陵は特に北で西に大きく振れ、これは延陵の西にある茂陵や平陵と共通する特徴である。この事実も考慮するならば、墳頂近くに設けられたテラスは時期差を示しているのかもしれない。

以上のように、前漢の皇帝陵については、比定、皇后陵の比当等基本的な問題が残されており、その構造や変遷については今後検討すべき点が多いことを再確認した。

参考文献・参考資料

『中国历史大辞典』秦汉卷、上海辞书出版社、1990年
『汉代长安词典』陕西人民出版社、1993年
『西安历史地图集』西安地图出版社、1996年
『中国文物地图集』陕西分册上・下、西安地图出版社、1998年
陕西省文物局『陕西文物古迹大观』全国重点文物保护单位巡礼之一、三秦出版社、2003年
陕西省文物局『陕西文物古迹大观』全国重点文物保护单位巡礼之二、三秦出版社、2003年
陕西省文物局『陕西文物古迹大观（三）』陕西省省级文物保护单位巡礼、三秦出版社、2006年
陕西省地方志编纂委员会编『陕西省志』第66卷文物志、三秦出版社、1995年
咸阳市渭城区文物管理委员会『渭城文物志』三秦出版社、2007年
咸阳市文物事业管理局『咸阳市文物志』三秦出版社、2008年
阎崇东『西汉帝陵』历代帝后陵寝研究书系、中国青年出版社、2007年
劉慶柱・李毓芳「西漢諸陵調査與研究」文物编辑委员会『文物资料丛刊』6、1982年
劉慶柱・李毓芳『前漢皇帝陵の研究』学生社、1991年（原著『西汉十一陵』陕西人民出版社、1973年）
中国社会科学院考古研究所『汉杜陵陵园遗址』考古学专刊丁种第四十一号、1993年
王建新・毛利仁美「前漢「後四陵」についての考察」『茨城大学考古学研究室20周年記念論文集　日本考古学の基礎研究』茨城大学人文学部考古学研究室、2001年
王建新「西汉后四陵名位考察」『古代文明』２、北京大学中国考古学研究中心･北京大学古代文明研究中心、2003年

なお、発掘調査やボーリング調査あるいは踏査・実測などの簡報、またそれらに基づいた研究論文は多数あるが、今回の踏査にあたって特に参考とした文献のみを掲げておくことにする。

写真１　長陵（南から）

写真２　呂大后陵（南から）

写真３　安陵（西北から。中央に見えるのが安陵。その手前の段は陵園の北辺で、版築で造られた垣の遺構と思われる。）

写真４　霸陵（北から。後方の山腹に霸陵がある。）

写真５　陽陵（南から）

写真６　陽陵南闕門遺址保護展示庁（南から）

写真７　南闕門遺址門道部分（西北から）

写真８　漢陽陵考古陳列館（東から）

写真９　茂陵（南から）

写真10　茂陵陵園の東門遺址（東南から。中央の高まりとその右手にある小さな高まりの間にある凹部が門道部分。現在の道路は陵園外に位置し、陵園内と比べて一段低くなっている。）

写真11　茂陵陵園東門の版築（東から。門の遺址中央部に厚さ10㎝ほどの版築層が見える。）

写真12　茂陵博物館（南から。中央奥の亭のある小丘が霍去病墓）

写真13　霍去病墓の石刻「匈奴を踏む馬」（東南から）

写真14　平陵（南から）

写真15　杜陵（南から）

写真16　杜陵（東南から。皇后陵墳頂部より望む）

写真17　渭陵（南から）

写真18　延陵（南から。中央右が筆者、左が林部氏）

写真19　義陵（南から）

写真20　康陵（南から）